

《吉田 実盛》氏

「見えない“いのち”に想いを寄せて」

見えないものの循環を考える

葬式が済み、火葬の後の収骨の際、「あの方は骨になってしまわれた」という言い回しをしがちですが、正しくありません。燃え残ったのがお骨なわけです。では燃えていったものはどうなったと思われますか。

見えないものに変わっているのです。体の約 7 割は水分なので、水蒸気となり、残りの 3 割の鉄分や塩分、カルシウム分などは原子、分子となって自然界へ戻っていくわけです。このとき重いものは地面に舞い降り、軽いものはどんどん上空に舞い上がっていきます。

それをあらわしたものが仏教では卒塔婆、五輪塔ともいいます。法事とかに戒名を書いたりするものも塔婆ですが、塔婆には 4 つの切れ込みがあり 5 つの部分からできていることがわかります。意味は第一層が地面、第二層が水、第三層が動いていくエネルギー、火、第四層が風、第五層が空を表しています。地水火風空の 5 つとなって大宇宙に散り散りバラバラで還っていきます。火葬が済んだ段階からそうなのです。

ところが地球上には風があります。ひゅーっと風が吹いてくるとこの見えない姿はちらばっていきます。今の話は千数百年前に仏教に密教が取り入れられた際に生まれた考え方ですが、15 年ほど前に流行った「千の風になって」、私のお墓で泣くな そこに私はいない 風になって大空にいる、というような内容だったと思いますが、結構マッチングしているんですね。

骨としてあるのは故人であります。燃えていったものも故人で、その見えない部分は宇宙に還っていきますよということなのです。亡くなった方は皆宇宙に還っていくわけです。そしてそこから新たなものが生まれ、死んだら還っていく。皆さんもその一人です。どのように、見えないものの循環を考えるかということが本日お伝えする大切なことの一つです。

唯識という考え方

仏教の考え方の中に唯識という思想があり、私の知っているものが世界の全てでそれ以外の世界はないという考え方です。宇宙はどこまでありますかと聞いたら、ある人は何兆光年の彼方までありますと言ったとしましょう。それと同時に、その人はそれより向こうにはないと考えたということになります。これが唯識思想というものの考え方なのです。自分の意識のありようで、それがあることにも、ないことにもなるわけです。喪中はがきが来て初めて人が亡くなったことを知りますが、それまでは自分の意識の中では亡くなったことを知らない、つまり生きているわけです。自分の心が全てなのです。

法要の持つ意味

葬式が終わり、初七日法要をはじめさまざまな法要をします。まず初七日って何でしょう。初めの 1 週間のうちの法要が初七日法要なのですが、毎週続いていき、四十九日まで続くと言われていました。その期間のことを中陰と呼びます。

中陰とは何でしょうか。もし遺体を放置していれば、遺体は腐乱していきます。腐乱するとは、生物の細胞死を迎えているということを表します。つまり腐るということです。腐っていない部分は細胞が生きている部

分なのです。そうすると昔の人は考えました。生きている細胞があれば、まだ痛いとか思うのじゃないか、そういう意識がどこかにあるんじゃないかと。それを中陰と言い、全部の細胞が腐乱死をした状態が、中陰を終わるという意味で、満中陰という法要を営もうとしているわけです。満中陰までは意識がそこにある、生きている細胞がある間は意識がこの世にとどまっていると見た。満中陰をもってどこかへ旅立っていかなければならない、極楽とか、天国とか。そんなふうに考えることができると思います。

人が亡くなると十三仏信仰というのに則れば、人は極楽に到着するまで 2 年かかると言われています。満 2 年経ち極楽へお着きになるときに、数え年で言えば三年となり、三回忌法要となるわけです。その後、四も五も六もなく、七回忌、十三回忌法要となりますが、何故なのでしょう。それは十三回忌は干支の一回りの数え年の年、七はその半回りの年であり、干支というのは法要の中で重要視されているのがお分かりだと思います。

故人が亡くなった年に生まれた子供が七回忌の時に小学校に上がる準備をし、次十三回忌の時には中学に上がろうとしていることになるんだらうな、そのような思いを抱いていただければ故人が亡くなられてからの年月と故人への想いが深まる法要になるのだと思います。

日常の意識について

では法要ではなく日常ではどうでしょうか。日本に伝わった仏教の多くが、六波羅蜜ということを重要視しています。布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の 6 つの言葉で人としてどう生きるかということを示しています。

そのうち精進について以下話をさせていただきます。精進とは、自分も含めお互いに頑張っていこうと励まし、進んでいくことですが、精進料理についても、難しく考える必要はなく、気持ちを込め、これが好きだったからお供えしようとなればよいと思っています。これに関し、私が出会った「最後の晚餐」という随筆を紹介します。

筆者の父親は癌で亡くなったのですが、闘病生活の末期を自宅で過ごしたときの話です。内臓が殆ど機能せず、点滴で養分を補給していた父が彼女（筆者）に卵かけご飯が食べたいとおっしゃいます。父が幼い頃、卵は高級品であり、病気になったとき以外はめったに口にできなかったのも、仮病を使って卵かけご飯を食べさせてもらっていたという話を思い出し、出来る限りの笑顔を作って、彼女はスプーン一口分の卵かけご飯を口元に持っていきました。「美味しいよ」と父は涙を流したそうです。「今の父も仮病だったら、きっと仮病だよ、病気のふりをしているだけだよ…」その願いも通じず、翌日息を引き取ったということです。亡くなってしばらくはそれを食べる事が出来なかった彼女が、5 年目の命日の日に思い切って卵かけご飯をつくり、一口舌にのせた瞬間、目頭が熱くなり、その卵かけご飯を父の仏壇にそっと供えた、という随筆です。皆さんどうでしょう。素晴らしいお供えになっていると思いませんか。卵かけご飯を通じて父を追慕する想いが今なおあるのでしょうか。父と娘を結ぶための素晴らしいお供えと言えるのではないかと思います。

お供えの話をしました。様々なところでそのような思いを持って生きていけば、私の意識は間違っているかどうかではなく、意識がそのように向いているんだからそのような行動をとるとなるときに、素晴らしい生き方が出来るはずであろう、ということが本日の結論です。